

Overton H. Taylor のシュムペーター学説における

「帝国主義論」「社会階級論」の位置づけについて

浜 崎 正 規

- I、はしがき
- II、学説上二論文の問題起点
- III、経済学と社会学の領域
- IV、二論文の位置づけ
- V、あとがき

I はしがき

一九五〇年一月八日社会科学者、ヨゼフ・アロイス・シュムペーター (Joseph Alois Schumpeter 1883—1950) は、理解せられざる孤児として無限の宝庫を秘めながら他界した。今日彼の社会科学体系の位置づけの反省が、あらゆる角度からもたれていることは、思うだに微笑ましい。彼の学説に方法的立場があるとする

るなら主観主義というものではなからうか。⁽²⁾と批判をなげかけることも、シュムペーター学説そのものへの内在的接近にもとづくものであるなら、我々は、愈々もってその主観主義の思想様式・態度がどのように学説構成の任を果しているかを検索して見るのも意義ある作業ではなからうか。

彼の学問的作業が野に立つ一本杉のような成長を続けてきたことは、何人も認めざるを得ないであろう。ハーバラー教授 (G. Haberer) が云うように⁽³⁾に彼の学説の孤立性の帰因は、先ず外的環境の数奇な政治的運命の嵐に吹きすさばれていたということもさることながら、彼の学者的性格そのものが、いわゆる「学派」

ると思う。

なるものの形成をなし得なかつた大きな役割をなすものと云わねばならないであろう。ハーバラーは、いわばシユムペーターが、資本主義或いは、社会主義その他のいわゆる「イズム」の改革者でもなく熱狂的な信者でもなかつた。と指摘して居り、彼の学者的風格について次の様に述べている。即ち「純粹に学問的領域では、シユムペーターの心の広さ、普遍性及び何らかの特種な研究方法に左袒する鬭争精神の欠如、又彼がありとあらゆる理論と方法との中に何らかの有用なもの、うけいれられ得るものを、見出したという事実がシユムペーター学派の發展をさまたげた。」と、ようするにハーバラー教授に從つて云うならば彼の学説もつ極めて純理論的、非党派的、非政策的な学問的風格及び学説形成の複雑性の兩者に帰する事ができると云えよう。ケインズ (J. M. Keynes) の学説が彼の追悼論文集の表題が単的に示すように極めて党派的、政策的であることを思い合はず時、これら巨星の学問的態様の發展的史実の「姿」を把握する一助ともなり得

さて、シユムペーターの学説が以上のように複雑な構造過程をもち、また純理論的風格を基底とするといわれる作業に対してハーバラー教授は、学説の眞の理解ならびに評価は一定の時間的距離を要するとなし次のように述べている。「シユムペーターの学問的労作の業積が経済学史上に占めることが出来得る地位のため、のいわば嚴密な評価の『時』はまだ来ていない。」⁽⁵⁾と、若しシユムペーターの学説がハーバラー教授がいうように時間的距離をはさんで後眞の評価・理解が生れるとするならば、我々は既にその評価及び理解のための時間的距離は、歴史的社会的に系列化され評価のためのあるいは、理解のための反省が浮び出て来ているのではなからうかと考える。(此の小論が試みる一面もその意味づけを問題にしていると思う)。ケインズの理論が動脈硬化した資本主義社会のヴィジョンを対象とした本質的に不況の理論であり、不況克服のための処方箋の作成にあつたことは周知の所である。しかしな

がら、その処方箋にもとづく薬の調剤は効を奏したか
という点決してそうではなかつた。第二次大戦の勃發
とともにインフレーションの問題にとつて變られ、ま
た、アメリカのケインズ派の予測によれば一九四五年
—一九四六年に現われるべき戦後の大不況も予想通り
に現われなかつた。アメリカ合衆国に関する限りでは、
資本主義はその正常な歩みを取り戻し、再度の景気
循環のリズムを奏する經濟發展過程を辿りはじめるか

の様相をもつにいたり「不況」の短期的理論に代つて
「成長」の長期的理論がもとめられる客観的条件が生
れたのである。以上のように客観的時間的な經濟動向
に考察を求めるならば、ハーバラー教授のいう時間的
距離の概念もさして理解に困難を覚えないであらう。

吉田昇三教授は、此の点について「ともあれケインズ
体系が動学化され、經濟成長や經濟変動の問題がケイ
ンズ派によつてとりあつかわれるようになる」と、スミ
ス、リカードの古典的体系やマルクス、シユムペータ
ーの体系のように、資本主義經濟の本質を擴張經濟と

みることによつて、經濟成長や經濟変動の問題と真正
面からくんできた理論体系の意義が再検討され、これ
らの本質的に動学的な体系と動学化されたケインズ体
系との長短得失の比較対象、あるいは、それが可能で
ある場合には、これらの体系の綜合といつたような問
題がとりあげられなければならない」と、述べて
おられるが、我々が述べ来たつた点を容易に理解する
一助ともなるであらう。

そもそもシユムペーター學説とは何ぞやという設問
に対して我々はシユムペーターの想源を辿つて見なけ
ればならないであらう。けれども一つの學説が礎かれ
たその想源を探索する場合いかに困難な作業であるか
は、特に此のシユムペーターの場合難問と云わなければ
ならない。前述したようにシユムペーターの學問的
態度がそうであつたように決して一源的な、二源的な
方法領域では、想源を把握することは出来ない。人あ
るいは、彼の學説の主なる環境を捉えてオーストリア
學派と規定するであらうし、また、レオン・ワルラ

スの一般均衡、クラーク、フイッシャ、テイラー等のアメリカ経済学、イギリス正統学派、パレート、ゾンバルト、マックス・ヴェーバー等の社会学理論等と夫々規定する。しかしながらシムペーターの思想の特徴は実際これらの想源の何れの一にあるものではなく、寧ろこれらを超える特殊の思考過程にあるのである⁽⁸⁾。従つて容易にその学説そのもののえの解答はなされず多彩なシムペーター像が描がかれてゐる訳である⁽⁹⁾。スウィージー(Paul M. Sweezy)は「シムペーターの学説の想源をマルクスにもとめているが、これとても、前述したことになるらの関係もないわば直入的なものであり得ない事は明らかであると云わねばならない。しかしながら、ともかくも、スウィージー氏の云う様にシムペーターとマルクスが対決される所には、なんらかの意味で想源的な類似の「場」を互に占めるか、或いは、背馳する理論であるにしてもそれは課題として解決するに価する意義をもつかであろう。曩に中山博士は、両者の著しい類似を始めて明確にしたのは、ル

ッツの一九三二年の著「経済学における景気変動問題」においてではなからうかと述べておられる。博士はルッツが景気変動の問題を経済的に採りあげたのは両者のみであると云えるを指摘されルッツの云うその要因の二項目を挙げておられる。すなわち、(一) 両者の主たる問題が共に経済の発展過程にあつたと云うこと、(二) 発展の問題を―否実は、経済の問題を―純経済的に貫いたことである。我々は、シムペーターの経済理論が資本主義を対象とする極めて「成長」の理論であるとすると、自ら景気問題に遭遇してもそれは、資本主義経済の内的な論理過程の当然の随伴現象として把握しなければならぬものであつたと、云わねばならないであろう。

我々は、多くのことをまえがきとして述べたようだが、いはば後述するシムペーターの二論文「帝国主義論」(『帝国主義の社会学』『Zur Soziologie der Imperialismen』)・「社会階級論」(『人種の平等条件における社会階級論』『Die sozialen Klassen im ethnisch

homogenous Milieu²⁾が学説上においてどのような位置をなしているかを考察せんが為の愚蒙な前論であつた。人各々これら論文を評して観念的主観主義の構造契機をなすものとかたづけしてしまうであらう。けれども、シュムペーター自身が死後メモによって語っているように彼の著作の中の六つの労作のうちに数えている所からしても、彼の思想を窮うには、極めて意義ある論文と思われる。ここにハーバード大学 Harvard University の O. H. Taylor (Overton H. Taylor) 教授による「シュムペーターとマルクス——シュムペーター学説における『帝國主義論』及び『社会階級論』(Schumpeter and Marx: Imperialism and Social Classes in the Schumpeterian System)」の内容を検討することによつて二論文の位置づけを考察して見よう。

テイラー教授の此の論文は、“The Quarterly Journal of Economics” Vol. LXV Nov. 1951 pp. 525—555 所載のものにあつて四章からなつてゐる。一章序文 (Introduction) 二章経済学と社会学——マルクスのシム

Overton H. Taylor のシュムペーター学説における
「帝國主義論」「社会階級論」の位置づけについて

ムペーターの場合 (Economics and Sociology: Marx and Schumpeter) 三章歴史の経済的解釈——マルクスとシュムペーターの対決 (Schumpeter vs. Marx's Economic Interpretation of History) 四章帝國主義及び社会階級についてのシュムペーターとマルクス主義の対決 (Schumpeter vs. Marxian on Imperialism and on Social Classes) の以上であるが便宜上第四章にカメラのレンズを向けて考察することに止める。

註

(1) シュムペーターの追悼論文集が “Schumpeter, Social Scientist” edited by S. E. Harris. Harvard University Press 1951 であることは、彼の学問的性格を表現したものである。

(2) 「金融経済」(一九五二年八月発行) 所載『シムペーター・十大経済学者』戸田武雄氏の所論参照。

(3) G. Harberler, “Joseph Alois Schumpeter,” 1883—1950. Quarterly Journal of Economics. Vol. 64 No. 3, pp. 382—372.

(4) ケインズ追悼論文集の表題は、“新しい経済学——理論と政策に対するケインズの影響——”

The new Economics—Keynes' Influence on Theory and Public Policy. Edited with Introductions by

- Seymour Harris, Professor of Economics, Harvard University (Alfred A. Knopf Inc. New York, 1948.)
(5) G. Harbender, "Joseph Alois Schumpeter, 1883—1950" p. 360
(6) 「経済理論」和歌山大学経済学会一九五二、九、所載「シュムペーター体系と『成長』の経済学」吉田昇三教授の論文二頁参照。
(7) 吉田昇三教授右論文三頁。
(8) シュムペーター「経済発展の理論」中山伊知郎・東畑精一訳六四〇頁参照。
(9) "Schumpeter, Social Scientist" edited by S. E. Harris. Harvard University Press, 1951.
Part II. The Man and his Work,
Schumpeter as a Teacher and Economic Theorist
—P. A. Samuelson
Part III. Schumpeter's Economics,
The Monetary Aspects of the Schumpeterian System—A. W. Marget
Reflections on Schumpeter's Writing
—W. P. Stolper
(10) P. M. Sweezy: The Theory of Capitalist Development p. 91. 中村金治訳一二九頁参照。
(11) 「社会」昭和二十二年十二月号所載『マルクスとシュムペーター』中山伊知郎著

II 学説上二論文の問題起点

シュムペーターの二つの論文「帝国主義の社会学」(“Zur Soziologie der Imperialismen”)「人種的平等条件における社会階級論」(“Die sozialen Klassen im ethnisch homogenen Milieu”)が夫々、ドイツにおいて一九一九年・一九二七年既に著わされていたのである。しかしながらそれら論文は埋められた生命としてかえりみられずに空しく「時」の波からみはなされた存在であったと云わねばならない。はしなくも一九五一年「帝国主義と社会階級」(Imperialism and Social Classes, Two Essays, Transl. by H. Norden, by A. M. Kelley, Inc., New York) として編集されて人目をひくにいったことは、一つの大事と云わねばならない。と、テイラー教授は最初に好意的態度を表し年次次のように続ける。「さて英訳されることによつて、これら論文が生命を活かすことが出来得るに當つては、編集者としてのP・M・スウィーシー(Paul M. Sweezy)

翻訳者H・ノオルデン (Heinz Norden) の両者に負うことが大であつて、全く賞讃の言葉を呈すべきである。その翻訳の体裁が著者の思想を透明に読みとることが出来る英国的「型」をなしてをり、またスウィージー氏の巧な穿つた序文に対して敬意を表すべきである。」彼は以上のように述べて後、シユムペーター自身がこれら論文を最も重要な労作となしているにも拘らずアングロ・アメリカの学者間に一般的にいつて注目されていないといふことは悲しむべきである。となげき、そして心ならずも期待もし、願うことは、翻訳された書物がアメリカの学問領域に新しい有意義な研究を刺戟し、また新しい研究の一助ともなるであろうし、加えて、シユムペーター自身の多角的な雄大な思想構造が彼のあらゆる部門にわたる労作と関連して究明され位置づけられるであろうといふことである。と述べている事は、ハーバラーのいわゆる時間的距離感を外在性にもとづいて内在的反省過程にまで求めることによつて埋めようとするものであると、いわねばならない

であろう。

さてテイラー教授は、一般的学問的内在性の反省を要請しながら自己の意とする考察の態度を示すのである。それによれば、自分は、現実的視野にもとづいて、シユムペーターに関する総合的思想構造を不十分ではあるが考察を試みんとするのである。此の論文で展開した見解は、スウィージー氏の序文に対して部分的に意を同じうし、また、意を異にする、いわば自己の反撥的態度に関連してなされたものである。と、かような態度の意図をもつ論文は読者の便宜上としてスウィージー氏の序文の本質的一節を長文にわたつて引用しているのである。我々は、テイラー教授の論文に引用されたその序文の一節なりともここに掲げることがは、或いは、論を進めていく上に親切であろうかと思われる。従つてここに要約して見ることにしよう。

伝統的なごくせまい範囲内で学問を考へてゆこうとする経済学者達は、シユムペーターの「景気循環」
「経済発展の理論」に本質的に無關係に「帝国主義論」

「社会階級論」がシムムペーター学説の新分野を構成するかの様な傾向にある。例えばR・V・クレメ

ンス (Richard V. Clemence) F・S・ドウディ (Francis S. Doody) は、これら論文の何れにも言

及しなす「シムムペーター学説」『The Schumpeterian System』⁵⁾を著わしている。また、G・ハーバラー (Gottfried Harberler) A・スミシズ (Arthur Smithies) の両者は、シムムペーターの社会学的観

点を前提として「帝国主義」「社会階級」を学説体系から分離して考察している。⁶⁾ 以上の方法的態度が

誤っているということに対していさぎよく反駁する確証をシムムペーター自身の著書ならびに口頭教授によって、みい出すことが出来る。これら論文がシムムペーター学説の総括的な論理を構成する重要な部門であると自分は思っている。——むろんマルクス

学派の社会科学体系の領域に匹敵はしないが——かような試みを備えているこれら論文の重要な外郭を指摘することによって、これら労作を位置づけ

ることは、有益なことである。

シムムペーターの学問的関心事は「景気循環」の副題「資本主義経済過程の理論的歴史の統計的分析」に最もよく表現されているけれども分析の核心は、既に「発展の理論」の中に現われている。けれども此の「発展の理論」によっては解釈の出来難い資本主義経済のいわゆる現実問題が山積されている。その現実問題の山積の中に少くとも数えあげねばならないのが帝国主義及び戦争の現象である。かような問題をならむ現実的趨勢は、全く決定的重要な意味をもっている。と、云えよう。そこにおいて、かかる趨勢を説明することの出来ない資本主義の経済理論は、明らかに、不適當なものであり、誤っているとさえ云わねばならない。シムムペーターの「経済発展の理論」は、帝国主義や戦争を説明することが出来ないのみならず、解決不能な問題を一層現出してくるであろう。帝国主義に関する此の論文は、まさしく本源的観点は此の矛盾を解決することであ

る。かような意味からして此の論文は、彼の理論構造に関する決定的重要な部門をなすのである。

「社会階級」に関する論文は、他の面におけると同様明らかに深くマルクスに影響されるところが多いが彼は異つた立場をとっている。先ず彼は、資本主義社会は、全社会的体形にふさわしい暫時の現象であるという基点を持つることによって、資本主義の活動機能及び発展に彼の作業を関連づけている。

(中略) 自分は此の社会階級に関する論文を資本主義の生成についての中心的労作であると考え、

「資本主義・社会主義・民主主義」は、資本主義の衰退について「社会階級論」的な見地を保持していると思う。此の論文は、一般的理論形式をもっており、論文の結論は、記録的歴史事実に関連している。しかしながら本質は、封建的貴族と、現代ブルジョアジーの二階級の分析に基盤をおいている。いわば資本主義の生成は、封建貴族の衰退と近代ブルジョアジーの発生との関係のうちに考え得られる。従

って、シユムペーターのその論文は、移向の「姿」に関するものと云わねばならない。だが彼自身その移向を体系的に処理してはいない。けれども彼の思考の外殻は、明らかに認識出来得ると思う。

テイラー教授はスウィーギー氏の序文のほどを参考のために挙げたのであるが、今一度要約して見れば、すなわち「帝国主義論」をいゆる「経済発展の理論」によって解決不能な現実的趨勢としての帝国主義及び戦争の問題に理論的解決の方策を与えるものとなし、「社会階級論」は、資本主義がそもそも暫時の経済体制であるという論理思考から当然三段階の理論、すなわち、生成・発展・衰退の理論をもたねばならないというシユムペーターの基底からして「社会階級論」を資本主義の生成の理論となしているのである。ここに於いて前述したように以上の序文の意味する思考方法に対してテイラー教授は、部分的に同意的な或は反撥的な態度を持つることによって自己の二論文に対する見解を展開しているのである。

さて、何はともあれ、スウィージー氏の序文に対するテイラー教授の所論に耳をかたむけよう。「後述する所から明らかになるように、此の序文に表現されているスウィージー氏の一般的考察に従っていくうちに。

シユムペーター学説に対する理解において無視し得ない間隙をひろげながら進んでいることに気がつく。けれども、社会学者や或いは、他部門の社会学者と歩調を合わせつつ経済学者がこれら論文を——『資本主義・社会主義・民主主義』の労作と同様に——問題とする

その一般的方法には、さし当って同意する。そして、たとえ、これらの論文が社会学部門の労作であると、区別づけられるとしても経済学の領域から厳密に限定することは、出来難い。そうであるとすれば、これらの社会学的労作がシユムペーターの『経済発展の理論』『景気循環』に決して無関係なものではないという点については、スウィージー氏と意を同じうする所である」従って、「これら二論文が總体的にシユムペーター学説の構成に重要な関連的位置にあることを究明すること

は、優れて、価値のあるものである。かかる見解にもづいて私の試みは、私自身の方法的限界領域においてなされる訳であるが、シユムペーターの思考内容について非常に重要な厳密な箇所においてスウィージー氏とひどく背馳をなしているといわねばならない。」と、耳を傾けているうちに我々は、背馳の本源的「場」がシユムペーターの思考内容の本質理解の相異にあることを知り得た。テイラー教授は、続けて「此のことは、スウィージー氏がマルクス主義者であるという事実に帰因すると、自分は全く考えている」と云う。周知のように、スウィージー氏が理論的トウルをケインズ理論のフレームの内に育て「命がけの飛躍」を求めてマルクス主義理論の道にある精英な学者である。そこで、テイラー教授は、彼がマルクス主義者であるが故に、シユムペーター学説と二論文との関連的把握に制約・限界が存在するというのである。シユムペーターは「マルクスに対立した複雑な異色の態度を持つることによつて、他の学者と異りマルクス主義理論の要因に対し

て否定的立場をとっていた。」と教授が云うことも既に「資本主義・社会主義・民主主義」において我々が窺い知る所である。⁽³⁾ その一貫した態度は、生産手段の私的支配にもとづく社会制度として資本主義をとらえることを社会学的観察であると批判し、そうして、経済関係及び階級利害によって人間の動向、歴史の趨勢を過度に単純化していると批難をあげせ自己の思考確立として生産の領域と社会との相互作用を考へるのであった。「スウィーजी氏がマルクスとシユムペーターの広範な体系相互間の類似点の度合を意味ありげに誇張し、また、本質的に明らかに相異している点を過度に軽視しているように思われる。」と、教授が批難をなげかける所には、何か、スウィーजी氏の考図に方法的形式性が潜んで、いなかっただろうか。テイラー教授は、このことの解明を与える為めには、「両学説（シユムペーター学説・マルクス学説）の理論方法、理論領域について、経済学と社会学の両者の関連にもとづいて考察してゆくことによつて明確化される

であろう」し、またそのことは「資本主義経済学の性格及びブルジョア文明、ならびに封建主義社会、社会主義社会に對峙する連鎖的な資本主義社会の変遷・重複・そして資本主義と帝国主義・戦争との関係・無関係についての本質的諸問題にも波及することにもなるし、また、マルクスとシユムペーターを対比することによつて、シユムペーターの社会階級論について力説することにもなるであろう」と、我々は教授に従つていけば教授自身の「社会学」「経済学」の所論を窺ふ必要に迫られている。

註

(1) Richard V. Clemence and Francis S. Doody, "The Schumpeterian System" 1950.

シユムペーターの経済理論の分析的基礎は経済活動の“circular flow”の概念であると著者は云う。そうしてこれを三つの範疇でもつて把握する。

(イ) 利潤率がゼロの場合の純粹理論的問題。

(ロ) circular flow が競争形態のモデルであるといふこと。

(ハ) circular flow のデータが資本主義経済社会の構造を包括してゐること。

吉田昇三教授の「シムムペーター体系と零利率」(和歌山大学『経済理論』第四号、昭和二十六年八月号)は参考に値する論文である。

- (2) Note by O. H. T. Dr. Sweezy's reference here is to the two memorial articles on Schumpeter, in the August 1950 issue of this Journal (Harberler) and the September 1950 number of the American Economic Review (Smithies). It is true that both authors classify these essays as sociological—and I agree, but am sure that neither Habeler nor Smithies meant thereby to set them aside, as Dr. Sweezy implies as if of only minor interest to economists. In fact the Smithies article goes even farther than I would go in the opposite direction, in Commending Schumpeter's sociological work to economists more highly than his technical work in economics.
- (3) Joseph A. Schumpeter, *Capitalism, Socialism, and Democracy*, Third Edition, 1950, Part I: The marxian Doctrine 参照。

III 経済学と社会学の領域

「経済学のひとり歩きは、危い」と、近代理論経済

学に対する非難の矢がはなれたように、今日近代理論経済学が極めて技術的な姿勢をなしていることを我々は認めざるを得ないであろう。テイラー教授が「経済学の限界領域の偏狭な絶対的観念、及び社会学の一般領域内における経済学の孤立性の否定」を最初に論じている点は、すくなくとも、スウィージー氏と同様の意見をもつ、ひとり歩きをばむ言といえよう。しかしながら「広範な学説を形成するシムムペーター理論の問題解決においては、単に過去の分野で解釈をなし、また、経済学を社会科学における他の分野から相対的に分類するに当って、常々シムムペーター自身が主張していたことがらを軽視しては、自分がこれから考察してゆこうとすることがらは、問題とならないであろう」と注意の眼を与えつつ自己の考察方向の進路に論及する。「シムムペーター学説が異彩な論理を基礎とすることによって、統一的総括的経済学的社会科学としてのマルクス主義思考に符合し、或は、一体化して考える事が出来た様に、自分は、その広範な学

説を把握することに努力しよう。」と、そうしてシュムペーターの学説を構成するあらゆる労作を少くとも経済学の領域と社会学の領域とに結果的に分別出来るとなし「シュムペーターの静態的首尾一貫した優れた主張は、多様な全著述内容が完全に統合的な一元的体系を形成しているという仮定をなすことを彼自身かたく禁じている。」という。我々は、シュムペーターが人間行為の動機・社会的現実の動源及び経済的行為の目的という様な先ず経済学者が遭遇する問題を避けることによつて理論の基礎の明確性と学問の自律性を保持しようとして、経済諸量の相互依存関係（交換関係）の記述が純粹経済学の課題であるとしたことを知つたのであるが、彼は、直ちにそのことに關して「以上の制限は、頗る重要であるけれども、ここにおいて、純粹且つ自己完了的にして、他の諸科学から独立せる理論の解決し得ない経済的問題が疑もなく存在する。その結果経済理論の領域は、二つの部分、すなわち一方では、我々の精密体系と他方では、厳密に『経済的』で

はあるが、前者が取扱い得ざる諸問題とに区分される。それは、分類を好む論理学者の遊戯ではなく、却つて事象の本質から当然にもたらされるのである。」と迫つたのであつた。今テイラー教授がシュムペーターは、経済学と社会学を相異なるサイエンスであることを擁立し、現実処理の概念設定が自ら相い異り、方法的基点を異にすることを主張していたことを述べる所も右のシュムペーター自身の言葉から我々は認めることが出来るであらう。そうして教授は、シュムペーターが、社会学を全体的統一性を要求する学問的性格として主張していたことは「資本主義・社会主義・民主主義」の第一章『マルクス』において彼自身の理論体系の思考方法を現出しているというのである。我々は前論においてマルクス批判を通じてなげた理論構成を看てきたのであるが、テイラー教授が「一つの体系の二つの部分的構造が二つの科学に構成されて存在しているといつても、それら両科学が決して無関係なものであるということを決して意味しない。」従つて「シュムペ

「ター学説を構成するいわば経済学と社会学が、学説においていかに相補的役割をなしているかの問いに解答を求めよう」とする意図も明瞭になってくる訳である。しかしながらシュムペーター自身は、社会学と経済学との主従関係或は、両者の相補的関係がいかにようであるかということについては、決して何ものも表明していない。と教授は述べている。そうして現実の場合勿論このことは、不幸であるけれども、自分なりの見解は、シュムペーターの理論見解と本質的に一致するであろう。がといて、自分は、シュムペーターの両科学に対する学識の程を主張しようとするのではない。という。先ずその所論を我々は窺ってみよう。

経済学の問題とする中心的特有の主要な要素は、経済量が経済社会の機能として、発展過程に現われ、変化する機能的相互変動関係の「型」を記述することである。その経済量は次の様な事項である。

- (一) 生産過程における労働及び資源の可変的受容量
- (二) 生産物の生産高

即ち、(一)、(二)の事項は、(イ) 全商品の価格、(ロ) 貨弊流出量—新旧通貨、流通界の信用—、(ハ) 企業販売収益、(ニ) 所得、(ホ) 不安定均衡、(ヘ) 総経費を意味する。さて、右の変数ならびに現象は、厳密な科学的作業を充分に集積し、組成する経済統計学によって、蒐集、分析されるものであるが、同時に、経済学者達は、経済と社会の結合状態の中に現実人間の継続的行動を横たえている経済量の動向の背後ならびに相互作用の状態を既述したように経済量の社会経済的機能化という点と関聯して心中に生成させるであろうということは、極めて大切なことである。従つて相関的可變的経済量の「型」を正しく把握するための経済学に関する絶対的限界が存在することは出来ない。諸現象そのものの状態を説明するのに充分な、なんらかの方法をもつ科学は、社会経済における人間の動向、活動者の経済行為、可変な制度的組織、及びその行為に影響する社会的文化的環境に関する事実及び思惟についてのその目的にとって充分な見量及び撰択を含んでいなか

ればならない。経済理論において用いる経済量の「機能観念」は、人間社会現象の現象面を掘り下げることをしていざかりか要求もしない。経済量の「機能観念」は、適当なデータに関する、ある仮定の対比のうちには解釈をもとめ、経済量の変化が起る関係それ自体の特有な主要事実を解釈するのである。或る歴史的社會における経済發展において、その歴史的社會の構成員の行動傾向、及び社会組織に關することがらは、本質的データの一部分である。しかしながら、それら行動傾向、社会組織及び歴史時点におけるそれら諸變化を、どのように説明するかは、人間存在の社会的秩序、社会的文化の發達を經てもたらされるのである。以上の性格からして、此の作業は、経済學に屬するものでなく、それ自体経済學者の理論と全く異つた概念と考察方法をなす専門家によつて展開を迫つてゐる精神的社会的科學の領域に屬するといわなければならぬ。

さて我々は、以上のテイラー教授の所論を窺つて後、

Owerton, H. Taylor の マスター 學說 によつて
「帝國主義論」「社会階級論」の位置からいふと

一再、反省を試みる必要はなからうか。いわば、近代經濟學の「近代性」が分析用具の近代性にあることは、一八七〇年代にはじまるいわゆる近代經濟學の優れた發展が、經濟機構の認識・理解のための手段としての分析用具の技術的仕組にあつたと云うことが出来るが、これをシムペーターに從えば「かような分析用具の一組が、特別の過程を形成する現象を取扱うために組立てられる場合、それをこの過程のモデル又は、シエマと呼ぶ」^③ことにあつた。この様に考えるなら、近代經濟學は、有用なモデル乃至シエマの形成をもとめて進歩發展してきたものとみられよう。しかしながら經濟機構の認識、理解が一組の關連図式、いわゆるモデルに換元すること、いいかえれば經濟財の依存關係を定立し得たとしてもテイラー教授が云うように歴史的時点における傾向（趨勢）と人間存在との關係は、なら説明され得ないであらう。いわば、ここにこそシムペーター理論が近代經濟學が「近代性」なるが故に残し去つた上述の不問の社會的事實の關聯（時点の

趨勢と人間存在関係)(或る意味では経済学が学的形成を求める以上当然問いを孕せねばならない)に眼を向けた彼の理論の特異性が存在するわけである。「相異なる領域を対象とする科学によってなされた成果を概念的企劃の統一によって総合を目的とすることは、一般的に誤つてをり」「相異なる科学が相互間の課題に解決を与えるために關聯的隣接的研究をなす趨勢は、現実的であり又極めて、大切なことである。」従つて、「此の観点から精神的社会的科学に属するものとしてシユムペーターの作業——或いはマルクスの作業——の一面面を描写することは、経済学者としての彼自身をなすら無縁な領域へ導くこともなく、経済学に關する彼の労作にゆかりない方向えいざなう訳でもない。また、マルクスに対比することによつて経済学者達にシユムペーター学説への興味を減退させるような考えは全然ない。けれども此の精神的社会的科学の領域について、また、マルクスやシユムペーターによつてその精神的社会的科学のうちになされた労作の相異つた多様

性を除外して共通の「型」について言及することは、いくらか必要なことであろう。」と述べ教授は、両者を対決させているのであるが今の場合便宜上省略することにする。テイラー教授がシユムペーターの理論を飽覽も経済学と社会学の相補的關連に求めて精神的社会科学の領域となしマルクス理論を「社会学及び経済学をひつくるめて徹底的に結合され融合された」形式の精神的社会的科学の域に属させた訳であるが、我々は愈々「帝国主義論」「社会階級論」をめぐつてより一步駒を進めてみよう。

註 (1) 「理論経済学の本質と主要内容」木村健康・安井琢磨 訳第二部静学的均衡の問題―第一篇・第三章静学と動学参照。

(2) 右訳本一七〇頁。

(3) J. A. Schumpeter, "Business Cycles," 1939, p. 31.

IV 二論文の位置づけ

シユムペーターの学説が純経済学的であると同時に経済社会学的でもあるということ、いわばシユムペー

ター学説において「経済学」と「社会学」が独立した二つの構成物でなく同一物の両面であるということについて我々は、テイラー教授の所論に従^つてきた。このことは、既にヘッククラー^ト (Herbert von Beckerath) が「企業者」の二重的性格をとらえることによって指摘している。⁽¹⁾ スウィージー氏が序文において云う資本主義の発生に関する労作ともいふべき「人間平等条件における社会階級論」(“Die sozialen Klassen in ethnisch homogenen Milieu” Archiv für Sozialw. und Sozialp. Bd. 57, 1927) においてより一層シムペーターの学説構造の社会学的一面を窺うことが出来るといわれる。本節において我々は、テイラー教授の「帝国主義論」及び此の「社会階級論」に対する所論を考^へ研することに^よつて、よりシムペーター学説を鮮明にする^こに努力しよう。

先ず教授の語るに耳を傾けるなら「シムペーターの『帝国主義論』は、いわゆる先進国に対する後進国の関係及び孤立国家に関する問題として、その論文の

Overton, T., Taylor's Schimpfeater 学説における
「帝国主義論」「社会階級論」の位置づけについて

意図があるのではなく、最も一般的感念における帝国主義の性質・種類及び原因についてその意図はあつた。従^つて、侵略的戦争・征服によって領土の拡張をなす帝国主義的民族・国家或は、統治団体の具体的史実をとらえ、その趨勢を刻明に述べている。」と、テイラー教授は、先づ「帝国主義論」の構造内容を見討するに當^つて前述のように語り乍ら続けて「その論文の中心的主眼点は、歴史の帝国主義的事実について論述してゐることである」という。さて、シムペーターの理論の最大なる目的が歴史的時間における経済的变化にあつたため、究局的目標が只単に恐慌や、景気循環或は、波動の変史でなく、あらゆる面にわたる経済過程の「歴史」そのものに基礎をおくトレンドであつた訳である。シムペーターが純経済関係を問題としながらも社会的勢力との関聯を熱心にとりあげていたことについては、前節でテイラー教授の精神的社会的科学なる範疇で考察して来たのであるが、「帝国主義論」の構造契機を考察する場合そのことはより一層想起さ

れねばならないであろう。ところでテイラー教授は「シユムペーターは、結論的な一章を設けて対立的理論すなわち、資本主義の最後の段階の産物としての帝國主義」と定義をなす近代マルクス主義者の理論に対して批判を加えている。既に彼が『帝國主義論』を著

とは、疑をはさむ余地がない」と、語る。さて、ではどのように本源的な相異を基底としていたか我々は先を急がねばならない。

した時には、ヒルファーディングの理論は、拡張していたのであるから、その章において、考察されていることは、明かである。従っていくらか詳細にわたる厳密な論議を見出すことが出来る。すなわち(一) 輸出独占に関する帝國主義分析、(二) 政府連合政策のカルテル政策としての輸出の侵略的強制等であるけれどもシユムペーター自身の理論は、ヒルファーディングの理論内容に対立し、影響されるなものもなかった此の『帝國主義論』の目的及び業績の所在は、歴史的事実全般にわたる分析に窮極的に自己が見出した複雑妥当な帝國主義論をもってのぞみ根本的に異なるいわゆる近代マルクス主義者の帝國主義理論の本質的内容(展開的基本課題)を考研することであつたといふこ

「近代帝國主義が本質的に資本主義の成熟・墮落した『型』であり『産物』であるという理論は、シユムペーターの気持にとってはナンセンスであつた」「そのことは、彼の論文の主要な点の附随的なことでもなく、それと無関係なことでもない」と、教授が云う時我々はマルクス主義者の帝國主義理論が資本の蓄積と利潤率の関連図式の限界概念として登場することを知るのであるが教授は、「シユムペーターは、マルクスの誤謬及び新マルキスト達がマルクスによって創造された武器があらゆる社会環境の真実な解釈を下すことが出来ると思うように、また帝國主義を解釈づける厳密な手段であると考えている一層誤謬に満ちた理論に注目した」というのである。そうして、シユムペーターにとつてのその武器は、階級闘争理論及びその闘争理論にまつわるあらゆることがらを除外した、

またマルクスが現実的発見を覆い隠していた資本主義に關するより包括的なあらゆる誤謬にみちた附加的限界觀念を排除した「歴史の經濟的解釈」であつた、と述べている。さて、シムペーターの生涯の課題が、理論と歴史と統計の総合にあり、それが實際に行われた「場」は、資本主義過程の分析にあつた訳である。

問題は、只單に經濟過程の機能化、動態的論理以上のものにあり、その社会構造の仕組・文明の生態に對する彼特有のトウルとしての「歴史の經濟的解釈」(the economic inter pretation of history)にあつたと我々は、考えることが出来るのである。従つてテイラー教授は、シムペーターがマルクス理論の誤謬を指摘している箇所を次のように挙げてゐる。(一) 投下資本販

路の機械的無限的資本拡張緊急の理論、(二) 集團生活水準の非改良、(三) 新市場の強制的獲得、(四) 投機物の販路、(五) 独占の無制限な成長、国家經濟間における競争の傾向及びあらゆる政治略の完全な断続的調節、(六) 資本家利益にもとづく国家政策、(七) 侵略的技

Overton H. Taylor のシムペーター學說における
「帝國主義論」「社会階級論」の位置づけについて

屬的資本主義の最高度の發展におけるブルジョア階級の性格に對する全面的に誤謬にみちた概念等、これらの項目を排撃することによつて、シムペーターは、自己の広範な思慮にもとづいて古代から二十世紀に及ぶ西歐世界における帝國主義について「歴史の經濟的解釈」の方法即ち社会学的分析によつて究明してゐると教授は述べる。そうしてその社会学的分析の方法は、「あらゆる社会・集團が目的追求に當つて考慮し調節するに常に帝國主義的であつた明白な事実をとり挙げている」「その帝國主義的といふのは、諸集團・社会が生活のために戦争や征服によつて領土の拡張を継続的に遂行したそのことである」即ちテイラー教授がシムペーターの「帝國主義論」を理解する所は、「歴史の經濟的解釈」による歴史的時間における社会・集團の經濟的環境、社会關係の態度がその契機に責任をもつて帰せらるるものであつたかと、いうことにあるだろう。所が当然一つの問題が起るであらう。といふのは帝國主義が嘗て一般的であつたとするなら、そ

の生産構造、経済組織は、マルクス学説においては、前資本主義的であつたということである。テイラー教授は、この点について次のように送べている。「シエムペーターによれば近代資本主義における、固有の總体的事情、即ち発展、社会構造、及び諸文化は、帝国主义ならびに地域的侵略戦争によって密かに害され、あまつさえ減退することとなり全面的支持を明らかに棄てることになるであらう」「近代における帝国主義的国家・組織及び外国政策上の現場における現象、存在の継続的可能性は、一般に全く成熟した純粹に近代資本主義的分野であると誤つて想像されている世界事情の事実によるものであつて、現に豊富にてあれ、部分的であれ、前資本主義的であり、また、はるか過去からもたらされた内部的趨勢によって影響された多くのものが存在する。一つの政策としての帝国主義の魅力に罹り易いことを資本主義の影響によって明らかにされてはいない。そこでその作業として資本主義の局部的『型』を導き出すことも可能である。」此の様な志向

を基底として迫るのが「帝国主義論」であると教授は結ぶのである。此の様な考想内容をもつ「帝国主義論」であるなら当然スウィーギー氏のいわゆる「経済発展の理論」の補則的役割をなすのが「帝国主義論」であるという命題に対して、テイラー教授は、いさぎよく反撥的態度を示さなければならなかつたであらう。即ち「かくして此の論文が資本主義現実のスペクトルとしての帝国主義・戦争に関してなんらかの解釈の方策を与え『経済発展の理論』に対して適確な補則の役割をなしているというスウィーギー氏の考え方には何等の根拠もないと思う。」と、我々が既に述べて来たように教授のスウィーギー氏の序文に対する反撥的意図が那邊にあつたかは、ここにいたつて漸く明瞭になつた。では、スウィーギー氏が「帝国主義論」をシエムペーター学説なかんづく「発展の理論」との関係において位置づけるに當つてテイラー教授の非難を受けなければならぬその根拠は、いづこに存するのであるうか、今暫く教授の所論に従つて見よう。「その論文

は、確然とした方途においてではないが「發展の理論」を補足している。というのは、「發展の理論」は、一般的に人類にとって資本主義經濟の發展が唯一の有利な成果をもたらす暫時の現象であるということを見い出すのである。論文は、あらゆる前資本主義的歴史え遡つて拡張し、「資本主義時代」も包含することによつて帝國主義及び戰爭の基底の事実の中にかような資本主義發展の永遠的狀態が全く善事を行うことであるという社会学的分析を加えるのである。」という。さて、シムペーターの資本主義社会觀がすぐれて企業者の革新を遂行する社会であつたことは周知の所である。その社会がいわゆる昇華においてのみ、質的構造變革をもたらすという創造的破壊にあつた様に此の「帝國主義論」も創造的發展を位置づける社会学の勞作であつたといわねばならない。従つて、テイラー教授が、「資本主義・社会主義・民主主義」の資本主義の衰退の理論のうちになされてゐるその資本主義的發展の社会的文化的成果を強調することと關聯して「發

Overton H. Taylor のシムペーター學說における
「帝國主義論」「社会階級論」の位置づけについて

展の理論」と「帝國主義論」との相補性は、考えねばならない」ということに、我々は理解の困難さを覺えないであらう。だが注目すべき問題として残される一点、即ちマルクス學派の「広範な体系」の中に支柱を全面的に共存し關連を保ち乍らも階級闘争理論を含む態度を除外する「歴史の經濟的解釈」の方法によつて非經濟的、社会学的分野の側面を形成するということである。我々は愈々ここに到つて問題の終局的發展化を辿つたことを覺ゆるのであるが、何故シムペーターがマルクスの階級理論を排撃しなければならなかつたのか、そして何が彼自身の積極的な思考論理であつたかの二つの課題が当然起つてくる。此の課題に答えるものこそテイラー教授は、今一つの論文「人種の平等条件における社会階級論」であることを指摘し、そしてこれこそ我々が直ちに認識し得る純粹に社会学的研究分析の強調的断片であるという。そして此の論文における立場は、勿論のこと「歴史の經濟的解釈」である。シムペーターの体系における此の「歴

史の経済的解釈」の意義及び位置づけがスウィーギー氏の観察においてなされている限りでは、真実であるといえるであろうが、スウィーギー氏は、未だシュムペーターの立場を殆んど理解していないし、また此の「社会階級論」の論文との関連において形成されている「歴史の経済的解釈」の意義を全く理解していないと思うと教授は、非難する。そうして確かにスウィーギー氏が云うように此の論文は、封建的前資本主義及び近代資本主義時代の両者を問題として取扱ひ、過渡期の或る断面——マルクスの様に輪郭がはっきりしていないが——を問題としているけれどもスウィーギー氏の場合は、既存の或る立場からシュムペーターの体系に対して論文が重要な貢献をなしているということを理解しようとする努力からマルクスの理論体系でもって、あたかもその論文がシュムペーター体系を満足させているかの様に比較している様に思われる。と、続けて非難をなげかける。

では、シュムペーターは、此の論文において、そ

の「歴史の経済的解釈」にもとづいて社会階級をどのように考えていたのであろうか、我々は、テイラー教授に從つて考察を進めねばならない。「此の論文において究明された社会階級の理論は、『帝国主義論』との關聯において、全く重要な位置にあり、そうして此の論文は、階級の存在、動向、変遷について考察可能な原因的事実、ならびに協同作業の動機・原理及び階級間の衝突、歴史的社会的変革の全過程における階級の役割を究明する根本的に非マルクストの理論である」と教授が語る時シュムペーターの「歴史の経済的解釈」が経済的動因 (economic motives) によつて動かされるということを意味するのが決定的でなく、いわば非経済的動因 (non-economic motives) の役割や mechanism の説明や social reality がどのように個人⁽⁵⁾の精神に反映するかの分析にこそ本質があつたのであるが、此の場合テイラー教授が云う様に「歴史の経済的解釈」の理解が此の論文において問題とされる限りにおいて、社会階級の歴史的社会的変革の全過程

における役割及びその存在の原因的事実の見討に意図が存したとするなら今一步その理論構成の遍歴を教授に従つて見なければならぬ。「人種的平等条件における」という題目は、複雑な人種の相違を把握出来る範圍に問題を導くことによつて抽象化することを意味する」と、いつても「人種の血統的系統及び異人種各々の先天的能力・性質が重要であつて決して社会階級論の問題に無縁のものでないとシユムペーターが強調した点は意義深い」と教授は述べ、続いて「シユムペーターは、あらゆる混合的人口における人種の相異が一般的に階級分業或は、階級集団のあらゆる具体的現象及び相異なる諸集団の動向、隆盛の事情を考慮する場合重要な役割を演じるということを自覚していた。けれどもそのことは、階級存在、実存の意義を説明する中心眼目ではない」と我々は、テイラー教授の所論の細部にわたつた考察を余儀なく断念しなければならぬが以上のテイラー教授の言葉から知る事が出来る様にシユムペーターの階級理論の意図にとつてマルクスの

Overton H. Taylor のシユムペーター学説における
「帝国主義論」「社会階級論」の位置づけについて

の階級闘争の感念即ち「不正義・支配・抑圧に憤慨した感情の陪音」に意をとめようとしないうのみならず、上級階級・下級階級が存在する限りでは、歴史の main-spring として作用し發展することを拘束されている強力な現実的動的進行の感念もシユムペーターにとつては、ナンセンスであつた。と語る教授の言も我々は故ありと認めざるを得ない。要するにシユムペーターが究明せんとしたことは、教授が云う様これまで歴史がある「型」の社会層による指導と他の大多数の人々による順応の歴史としてとらえることによつて歴史の動源及び文明の色彩をあやなすものを、エスプリ・ド・コールに支配されたある型の社会層においてある。「シユムペーターにとつて静的社会的平等は、いわゆるヒエラルヒー或は上位に立つた優者と一致する社会的ピラミッドを必然的に含んでをり、多くの劣等者は、これゆえに「底級」な彼等の位置に満足したのである」と教授が語るところも符合するシユムペーター学説そのものの理解ではなからうか。

ここにおいてシムムペーターの動的歴史形成者こそ、個人でなく、国家でなく、いわば社会層ごとと云わねばならないであろう。歴史的社會に遍歴を求めざるは我々は、これら社会層を形成する人々の「型」がどの様に交替を余儀なくしているかに思いつたるであろう。そうして、近代資本主義社會の指導的社會層が外ならぬシムムペーターの云う「企業者」型の人間類型であることは、何人も認めざるを得ないであろう。いわば近代資本主義社會がもつ倫理的価値機構に支柱を求め、特有の生活原理の階級図式をピラミッドとしてシムムペーターは、考へてであろう。けれども彼自身が認めていたように、これら倫理的価値機構が或は、生活原理が底辺から変革を求めている今日的歴史的特点であることも、我々とても認識しなければならぬ。

註

- (1) Herbert von Beckerath, "Joseph A. Schumpeter as Sociologist," *Weltwirtschaftliches Archiv*, Bd 65, 1950

Beckerath は既に右の論文以前に「發展の理論」の企

業者の性格について社會学的解釈をなす左の論文を發表している。

Einige Bemerkungen zu Schumpeters Theorie der Wirtschaftlichen Entwicklung, Schmollers Jahrbuch 1929.

- (2) Joseph A. Schumpeter, Capitalism, Socialism, and Democracy, Third Edition, 1950. p.p. 10—11.

The economic interpretation of history does not mean that men are, consciously or unconsciously, wholly or primarily, actuated by economic motives. On the contrary, the explanation of the role and mechanism of non-economic motives and the analysis of the way in which social reality mirrors itself in the individual psyches in an essential element of the theory and one of its most significant contribution.

V あとがき

我々は、四節にわたって、シムムペーター學說と「帝國主義論」「社會階級論」との關係及びその兩論文の學說における位置づけをハーバード大学の教授 O・H・テイラー氏の所論を検討することによって考

察してきた。教授は、結論として、「経済学的・社会的な理論の両者を包括する優れて首尾一貫したシムペーター体系が事実存在するということを自分は考察したように思う」「これら二論文はシムペーター学説において重要な部門であつて、著名な彼の労作と関連して、それらによつて啓発されたシムペーター学説そのものの重要な分野である。その分野における全構造は、マルクス学説が好まれるに比較して、そう一般的に問題とされない。(シムペーターの理論がマルクスに負うているにも拘らず)最も決定的相異は、歴史の発展動源としての階級闘争、階級支配、及び抑圧の理論を放棄したことである。そうして相異なる觀念がその役割を演じるために用いられた」それから「シムペーターがマルクスに負う主なる事項が『歴史の経済的解釈』であつたにも拘らずマルキスト的補則(階級闘争理論)なしで全く相異つた武器と、また豊富な成果としてシムペーターの手中に生成した経済的解釈をその代りに使用するいわば『歴史の経

済的解釈』であつたといえよう」と教授は、結論のである。この様にして二論文は教授の場合一環したシムペーター体系の中に抱かれることによつて社会学的労作は生命を甦らしたのである。そうして我々は、教授の二論文に対する検討からスウィージー氏の序文との背馳の論理的所在も明らかにすることが出来た。さてシムペーターが経済的事実において、まさに最も興味あるものは、その社会的側面、勢力関係、発展其の他であることを認め、純粹経済学の第一の制約が、社会科学においてすぐれて興味のある問題の大部分を処理し得ないことにあり、その理論的武器の成熟が「資本主義・社会主義・民主主義」であることは、シムペーター学説の展望を讀みとらんとする人なら周知する所である。近代理論経済学(シムペーターの学説を一応除いて)が、価格分析或は、国民所得の分析にしろすべて経済の構成像を描くに一定のタームに依存して技術学的姿態をなしいわば経済のメカニズムの動向にレンズを合わせることに由る問題「場」を処理す

るとするならシュムペーター学説形成の問題「場」が経済のオルガニズムの動向にレンズの焦点がある経済社会の分析の方法的立場をなしていたということが出来よう。そうして彼のいわゆる経済学の理論こそ経済のオルガニズムの動向を把握する理論的な論理「場」を提供していたということが出来るであろう。

高田保馬博士が「すべての社会学的経済学について見るに経済理論の非現実性を救おうとする意図においては、一であるにしても、社会に包まれたままの経済について、これを理論化しようとするものは、其目的を達しがたい。一旦は、経済を経済として取出したる上において、これを理論化する、これが一次接近である。次に包んでいる社会の側を単なる与件として見ることなく、その側における変動又は、差異を考えて、これによる経済の変容を与える、いわばそこに二次的又は、漸次的接近を行う。この方針によってのみ社会学的経済学は自己を十分に理論化し得るであろう。」と述べておられることは、我々が、今の場合吟味する

に価する論述であろうと思われる。

テイラー教授の論文の意図がいずこにあるともシムペーター学説そのものは其の歴史的评价を要求せんとしつつある。我々は残された問題の多きを覚えつつすぐれて学説の偉大さを感じずには、おられない。

最後に只一つテイラー教授の論文を読み了てさみしく思うことは、純経済的理論と社会学的理論との交渉或はその交渉の媒介の要因が何であるかということに論及していない点である、ともあれテイラー教授とともに我々は今後のシムペーター学説の研究があらゆる角度からなされることを念じなければならない。

註

(1) 「理論経済学の本質と主要内容」木村・安井訳三〇二頁。

(2) 「経済学説の展開」高田保馬著有斐閣二十六年二月発行一四三—一四四頁。